本指導案は、「2019 年度 横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会」において横浜市立中学校の教員と横浜美術館が協働で作成しました。

横浜美術館コレクションを活用した授業づくり

美術科指導案

１．題材名　**「偶然から、世界をつむぐ」～何かが創造される現場に立ち会う～**

２．題材作品　マックス・エルンスト　《白鳥はとてもおだやか…》
1920 年　コラージュ、紙　8.3×12.0ｃｍ

３．実施学年　第２学年

４．学習指導要領との関連　指導事項　Ｂ鑑賞（１）ア（ア）〔共通事項〕

５．本題材について

本題材の根幹には、作品が作者の思いや意図を込めたものだけではなく、たとえ作者の意図とは違っても、鑑賞者が様々なとらえ方をすることが新たな意味を創造する場となり、作品としての面白さが広がっていくことを体験させたいという思いがある。美術科で制作したコラージュによる作品に対して国語科で詩作する。言葉では説明しにくい抽象作品との出会いによって、一見して理解が困難なものを解明しようとする思考力や、主体的に考えを抱く想像力の向上を目指す。また、お互いの感想や気づきの違いを味わうことで、自他の差異に気づき、多様な価値観について知る機会としたい。さらに、同じコラージュという技法で制作された、マックス・エルンスト作《白鳥はとてもおだやか…》を鑑賞して学習を深めることで、美術作品や表現することの幅広さを身近に感じ、将来にわたり美術を愛好する心情を育みたい。

６．題材目標

＜美術科＞

〇偶然性を取り込んだコラージュによる作品を捉える造形的な視点について理解する。（知識及び技能）

〇作品を深く見つめてよさや美しさを感じ取り、イメージを広げて自分なりの価値や世界を思い描いたり、感じたり想像したりしたものを伝え合うなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深める。（思考力、判断力、表現力）

〇主体的にコラージュによる作品を鑑賞する活動に取り組み創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を深め、心豊かな生活を創造していく態度を養う。（学びに向かう力、人間性）

＜国語科＞

○感じたことや伝えたいことが読み手に伝わるように、表現や構成を工夫して書く。

○つくった詩を互いに読み合い、描写や構成の効果などを観点とした感想を交流し、自分の考えを広げる。

○自分が感じたことや思ったことが、読み手に伝わるように言葉の使い方や表現を工夫して詩をつくろうとする。

７．題材の評価規準

＜美術科＞
新教育課程による評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・意図せずコラージュした作品の形や色彩、材料などの性質や、それらが感情にもたらす効果を理解している。 ・形や色彩の特徴を基に、対象のイメージをとらえている。	・造形的なよさや美しさを感じ取り、創造的な工夫などについて考え、自他の差異や多様な価値観について気づくなどして、美意識を高め、見方や感じ方を深めている。	・美術の創作活動の喜びを味わい主体的にコラージュによる作品の鑑賞の幅広い学習活動に取り組もうとしている。

＜国語科＞

思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・作品から得たイメージが伝わるように、表現技法を用いたり、構成を工夫したりして詩をつくっている。 ・つくった詩を班で回し読みし、良いと思った点や工夫についての感想を交流して、自分の考えを広げている。	・自分が感じたことや思ったことが、読み手に伝わるために、言葉の使い方や表現、構成を工夫して詩をつくろうとしている。

８．準備（材料・用具・人材　等）

作品図版　マックス・エルンスト《白鳥はとてもおだやか…》、ワークシート、
コラージュ材料、ケント紙、はさみ、接着剤（のり）タブレット端末、モニター

９．授業展開（全５時間）

	第１時　美術科	第２～４時　国語科	第５時　美術科
活動計画	 ・マックス・エルンスト《白鳥はとてもおだやか…》と出会う。課題の目標や授業のながれを確認する。 ・第一印象をワークシートに記入する。 ・グループで、偶然性の高いコラージュによる作品を制作する。意図しないオートマチックなデペイズマン*としてのコラージュ*制作を体験する。	 ・ワークシートを用いて、詩の表現技法について学ぶ。 ・詩を創作したのち、創作した詩の感想について意見交換する。 ・美術で制作したコラージュ作品をクラス内でシャッフルし、ランダムに一人１枚配布する。出会った作品からイメージを膨らませて詩を創作する。 ・作った詩の感想を付箋紙に記入して作者にフィードバックする。	・エルンスト《白鳥はとてもおだやか…》を再び鑑賞し、作品からイメージを膨らませて詩をつくる。 ・作った詩を鑑賞する。感想を付箋紙に記入してワークシートに貼り、作者にフィードバックする。 ・再びエルンストの作品を鑑賞する。新たに感じたことや、気づきについてまとめる。
学習活動に即した評価規準	知識・技能 ・形や色彩の特徴を基に、対象のイメージをとらえようとしている。 思考・判断・表現 ・エルンストの作品から、自分が感じたことを表現し、相互評価を通して自他の差異や多様な価値観について気づき、考えている。 主体的に学習に取り組む態度 ・コラージュ技法に関心をもち、主体的に作品を制作し、創作活動の喜びを味わっている。	思考・判断・表現 ・作品から得たイメージが伝わるように、表現技法を用いたり、構成を工夫したりして詩をつくっている。 ・つくった詩を班で回し読みし、良いと思った点や工夫についての感想を交流して、自分の考えを広げている。 主体的に学習に取り組む態度 ・自分が感じたことや思ったことが、読み手に伝わるために、言葉の使い方や表現、構成を工夫して詩をつくろうとしている。	知識・技能 ・詩を作ることで深まった作品に対する感じ方で、形や色彩から対象のイメージをとらえようとしている。 思考・判断・表現 ・詩を作ることで広がった作品に対する見方や感じ方を、再びエルンストの作品と出会う際に深めている。 ・エルンストの作品から、自分が感じたことを表現し、相互評価を通して自他の差異や多様な価値観についてきづき、考えている。 主体的に学習に取り組む態度 ・詩を作ることで広がった感じ方を基に、新たなイメージや価値を積極的に見出そうとしている。

*「デペイズマン」と「コラージュ」については最終頁の「授業者用資料」を参照

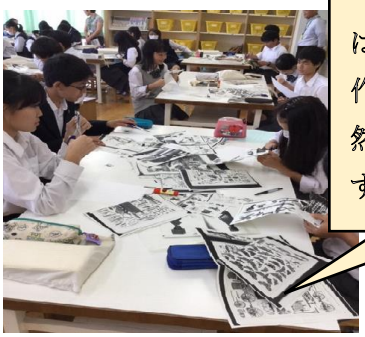
１０．学びを深めるための具体的な手立て

＜作品と出会う＞

生徒が感じたことを伝える場面では、ワークシートをモニターに映すことで、聞き手の関心が高まる。

実際の大きさ以外の情報を伝えないことで、生徒の関心や想像が深まる。

＜コラージュ作品制作＞



一つコラージュしては隣の人へ渡して、作者の意図よりも偶然性が高まるようにする。

＜出来上がった作品例より＞

黄色の付箋紙には、作者による詩の解説や工夫を記入する。

赤色の付箋紙には、鑑賞者の感想や作者へのメッセージを記入する。

１１．学びの成果

○普段の授業では発想に苦慮し、活動に入るのが緩やかな生徒も、偶然性の高いコラージュ制作では積極的に制作に取り組む姿がみられた。また、自分が制作したものではない作品と向き合うことで新たな発想にふれ、詩作に対して前向きに取り組む生徒が多かった。

○詩を作ることで深まった言語表現を基に、最初は分からないものに対しても、イメージを広げて、自分なりの価値や世界を思い描く力が高まった。

１２．授業改善の視点

○コラージュ材料の選択次第で作品の傾向が決まるので、材料に多様性をもたせる必要がある。

○鑑賞授業などで発表する機会を継続し、自分の考えを積極的に伝える習慣を身につけさせることで、より多様な価値観に気づくことができる。

１３．指導案作成者のコメント

作者の考えを極力排除し、「作品を鑑賞する人が発想を広げていくことが作品のスタート」とした作品に面白みを感じました。授業を通して生徒の発想力や自分なりのイメージをより深める方法はないか？ということを探った結果、最初は分からないと感じたものに対しても、イメージを広げて、自分なりの価値や世界を思い描く力が高まったと感じています。

指導案作成者：横浜市立中学校教諭　（美術科）宇野拓哉／山田香織／吉田浩気
（国語科）桐ヶ谷芳宣

授業者用資料

■作品・作家について
マックス・エルンスト［Max ERNST, 1891 – 1976］
《白鳥はとてもおだやか…》
1920年
コラージュ、紙
8.3×12.0cm
横浜美術館蔵

　マックス・エルンストはシュルレアリスムを代表する作家の一人です。シュルレアリスムとは、夢や無意識あるいは非合理的な世界に着目することで、それまでの芸術とは異なる新しい価値を作り出そうとした、20世紀の前衛芸術の中で大きな広がりをみせた運動です。

　本作《白鳥はとてもおだやか…》は、格納庫の前にフランス軍偵察爆撃機がある印刷物を下地に、15世紀ドイツの画家ロホナーの描く天使の図像、さらに別の印刷物から白鳥のイメージを貼り合わせたコラージュ作品です。コラージュはエルンストの最も重要な手法の一つで、1919年にコラージュと出会った時の様子を自伝メモに残しています。

> ――そのよせ集めの不統一が見る眼を混乱し、感覚を麻痺させ、幻覚を呼び起こし、そこに描き出された対象に急速に交代する、新しいいろんな意味を与えるのだった。私は突然、自分の「視力」が高揚し、新しく生まれたオブジェが新しい図柄の上に現われるのを見たのだ。
>
> 『エルンスト展図録』より（1977年、編集・発行：西武美術館・朝日新聞東京本社企画部）

エルンストにとってコラージュが主観によるイメージを表現するためのテクニックではなく、人間の主観による創造性の限界を飛び越えるための、シュルレアリスムの考え方につながっていくものであったということがわかります。つまりエルンストは、自らの意識にコントロールされない、いわば自分ならざる何者かによる創造の場面に立ち会うという制作の姿勢を貫いた生粋のシュルレアリストであったと言えます。

【コラージュとデペイズマン】
　コラージュは、フランス語で“糊付け”を意味します。20 世紀の初頭にピカソやブラックが行ったコラージュでは、印刷物やボタンなどの物を貼りつけ、触覚的にも異質さを感じさせる表現に重点が置かれていました。これに対しエルンストの作品では、むしろコラージュは物質性から解放され、見る者をイメージ世界へと導きます。この作品でも、複数の断片的なイメージがコラージュにより巧みに統合されており、小さな画面の中に創りあげられた世界に見る者を引き込んでいきます。
　デペイズマンは、フランス語で“異郷に身を置く”ということを意味し、イメージや物を異質な場で出会わせることで違和感や驚きを生みだし、「超現実」の世界へと飛躍しようとするシュルレアリスムの重要な方法論です。
　本来とは異なる場面や文脈での不意の出会いから生まれるエルンストのコラージュ作品の不可思議なイメージは、このデペイズマンという方法論に基づいています。

（横浜美術館　教育普及グループ）